

真珠湾の英雄から平和の伝道師になった淵田美津雄

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)



一九四一年(昭和十六)十二月七日午前七時四十五分(ハワイ時間)。

ハワイ真珠湾上空にあった海軍機動部隊第一次攻撃隊長淵田美津雄中佐は、従えた爆撃機、攻撃機百八十三機に「ト」連送のモールス信号「ト、ト、ト、ト」を発信し、「全軍突撃せよ」の命令をくださった。

日曜日朝のハワイ米海軍基地から反撃の様子は全くない。淵田は七分後に「トラ・トラ・トラ」(われ奇襲に成功せり)と打電、戦艦アリゾナなど八隻を撃沈・大破させる戦果を上げた。日本は米太平洋艦隊撃滅の報に沸き、淵田は一躍、真珠湾の英雄となった。

一方、宣戦布告なき攻撃に米国はだまし討ちだと激怒し、ルーズベルト大統領、議会、国民とも一致結束して、それまで消極的だった第二次世界大戦参戦に立ちあがった。

淵田の攻撃命令がいわば、日本の敗戦の号砲となったともいえる。



真珠湾以後、日本軍は破竹の進撃を続けて連戦連勝だったが、わずか半年後のミッドウエー海戦で大敗を喫し、太平洋戦争の潮目はかわる。

この時、淵田は病気で戦闘に参加しなかったが被弾して重傷を負い、その後は第一線を退き横須賀基地で教官になる。

原爆投下前日まで広島におり、命拾いした淵田は二日後に再び被爆調査で現地入り。おびただしい市民の殺教と、惨たらしい被災地の様子が真珠湾とダブって見えた。「なぜ人間



同士がこうも憎み合わなければならないのか」と自問しながら、生き残った自責の念とともに、多くの軍人仲間、市民の死を悼み、米国への憎しみと反感を募らせた。

〔軍人から伝道師へ〕

ここまでなら淵田は国を愛し、戦いに殉じる優秀な軍人の一人であったというだけだが、後半生は百八十度転換して、キリスト教に入信し、平和の伝道者となり全米を回るという回心を遂げた。

敗戦後、淵田は故郷の奈良県に戻り農業を営むが、連合軍捕虜を虐殺した C 級戦犯裁判の証人として横浜軍軍事法廷に喚問された。

この時淵田は、勝者が敗者を裁く復讐劇に反発し、逆に米軍の捕虜虐待を暴こうと、米国帰りの日本人捕虜に聞いて回った。そこで美しい話を聞いた。

米ユタ州の日本人収容所で、若い女性が病人を献身的に看護し世話をしていた。なぜかと聞くと、「両親が日本軍人によって殺されましたから」という。

彼女の両親は宣教師で、フィリピンに住んでいたが、日本軍にスパイ容疑で斬り殺された。

殺される直前の三十分に、両親は聖書を読んで「父よ、彼らを赦したまえ、そのなす所を知らざればなり」と祈り、静かに死を迎えたという。

女性は両親の遺志を継ぎ、収容所に来ていた。感動的な話だが、伝聞だったこともあり、まだ淵田はキリスト教の精神を得心しきれなかった。

昭和二十三年二九四八)十月、淵田は渋谷駅前「私は日本の捕虜でした」というパン

フレットを配っている東京爆撃隊の元爆撃手、1・デシーザーに会った。彼は中国で日本の捕虜となり、散々虐待された末に生き残った人物であった。しかし宣教師となり、「汝の敵を愛せよ」というキリスト教の人類愛で敵意を克服して、日本に布教に来たのである。

〔一万キロの平和の伝道〕

人類愛を実践するデシーザーとの出会いに、淵田はカミナリに打たれたような衝撃を受け、聖書を読みふけりキリスト教に帰依する。大阪堺の教会で洗礼を受けた淵田は何千人もの集会で説教をし、敵意を克服して平和に至る道を説いた。

一九五二年十月、初めて渡米して全米各地の教会を伝道して回った。同年十二月七日の真珠湾攻撃の日には米テレビの「ビリー・グラハム・ショウ」に特別ゲストとして出演。

入信までの心の軌跡と自らの罪を告白して、憎しみからの解放と和解を訴え大反響を呼んだ。一部から「殺人者は帰れ」との非難を浴びたが、多くの人は淵田の話に感動した。

淵田は憎しみの連鎖を断ち切るために、日本も米国も悔い改めるべきだと全米各地を説いて回り、十年間で約一万キロにもおよぶ平和の伝道をおこなった。

一九五三年、淵田は初めてハワイを訪れ、現地の新聞は「帰ってきた男」と大きく報道した。六十日間滞在して、ホノルルの教会で話をし、真珠湾や警察、軍隊を訪問して伝道した。

淵田は昭和四十二年(一九六七)からは日本に帰り、聖書で「人類の破滅」を意味する『夏は近い』という題名の膨大な自伝を書き続けた。

そして昭和五十一年五月、七十四歳で死去した。

〔禁転載〕